

---

呪われた青少年

～?蜘蛛怨み～

依景吏音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪われた青少年

～？蜘蛛怨み～

### 【Nコード】

N3088K

### 【作者名】

依景吏音

### 【あらすじ】

小さい頃に苛められて蜘蛛の怨みを買ってしまった主人公・轟七世。ある日、七世のクラスに”鬼蜘蛛使い”と名乗る転校生・山埜 八雲が転校生して来て・・・！？

## プロローグ

十プロローグ十

チャットルーム

「ねえ、知ってる？蜘蛛の呪いの噂？」

【知ってる、知ってる。確か、蜘蛛の巣や蜘蛛を殺しちゃいけない時間に蜘蛛を殺したら、蜘蛛の怨みを買う、って噂だよネ】

蜘蛛を殺しちゃいけない時間帯って？

【詳しくは知らないけど大体・・・朝】

「かなりアバウトな情報だね・・・」

まあ、良いんじゃない、アバウトで

【世の中はアバウトで良いよ！】

「でも、実際に呪われた子も居るらしいけど・・・本当かな？」

【本当だよ！蜘蛛の怨みを買った腕に大きな蜘蛛の絵が現れるらしいし！！】

「あーあ、始まっちゃいましたよ。松宮さんの激しい妄想が・・・」  
ですね。じゃ、私は朝早いので先に失礼しますね、樹さん

「そうですか、ではお休みなさい。同じく明日早いので僕も寝ます」

奈無さんが退室しました

中山 樹さんが退室しました

【・・・で、ですね！！蜘蛛の呪いを解くには“鬼蜘蛛使い”の生き血を飲むと治るらしいですよ・・・って、皆居ないし！！！！酷いよー・・・・・・・・あ、こんな時間だ。では、私もおやすー】

松宮さんが退室しました

プロローグ、これにて終了

## ブログ（後書き）

はじめまして、水無月聖です。初めて投稿するのであまり上手くありませんが、頑張って書かせて頂きます。気に入ってくれると嬉しいです！

## 壱蜘蛛語

### 壱蜘蛛語

「では、一人ずつ自己紹介をしてくれ。因みに先生は寺山<sup>テラヤマ</sup> 昌也<sup>マサヤ</sup>だよ。  
よろしくな」

平和な日常。今日から新しい制服を来て新しい学校に登校して、今は自己紹介の真っ最中だ。

「次は・・・九重」

「へーい。青依学園から来た、九重<sup>コノエ</sup> 雅<sup>ミヤビ</sup>です」

「見た目が馬鹿に見えるが名門校から来たのか」

「人は見掛けに寄らない、だよ。先生」

「まあな。次、轟」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「読書はやめんか！自己紹介をしろ！！」

「青依学園、轟 七世」

「先生、七世から読書を取ったら何ものこらないよぉー」

名門校・青依学園から来た二人の天才は全くもって人の話を聞かない。かと思ったら、片方は腕に包帯を巻いている。

「轟、その包帯は？」

「ここの一言。」

「あんたには関係ない」

そしてぶちギレる先生。

「ふざけんな、轟!!」

こうして平和な高校生活が開幕した。

## 壱蜘蛛語（後書き）

壱話目です。あまり時間が掛かっている気もする・・・

## 式蜘蛛語

式蜘蛛語

大波乱の自己紹介から4ヶ月。8月のある日。一人の転校生が雅と七世の前に姿を現わせた。

「転校生を紹介する。まずは、本を読んでいる轟。本を机の中に入れやがれ。で、朝っぱらから寝てやがる馬鹿を叩き起こせ」

「まあ、良いじゃんかああああ〜」

「良くねんだよ、九重」

「俺は気にしませんよ、先生」

「心が広い転校生に感謝しろ」

「改めまして。今日からこの学校に通う事になった、山埜<sup>ヤマノ</sup> 八雲<sup>ヤクモ</sup>です。よろしく」

「よし、分からない事があつたら、その馬鹿共に聞け」

「馬鹿じゃないし」

「筋肉馬鹿はほっとけよ。雅が筋肉馬鹿になりたいのなら話は別だけどね」

先生の怒りに触れた。

「わあ。真面目に勘弁」

先生が切れる。

余っていた机が宙を舞う様にふっ飛ぶ。

二人はあっさり避ける。

「何で本読みながら避けられるんだ!!!?」



「七世だもん」

すると続けて教卓がふっ飛ぶ。  
勢いがあり過ぎて辛うじて避けたが、バランスが取れず、七世が転けそうになる。

転校生が支えてくれる。

「っと。大丈夫？」

「・・・どうも」

お礼を言つと離れる。

が、腕を捕まれ引き止められる。

「何？」

「君から”チ”の臭いがする。しかも、かなり濃い臭いが」

意味不明な事を云われ、反射的に殴ってしまふ。

「ったあー・・・」

「いきなり、変な事云うから」

「”チ”だよ。別に変な事は言っていないはず」

「”血”？」

「”蜘蛛”」

「蜘蛛？」

「そつ」

この会話から平和な日常は崩れた。

## 参蜘蛛語

### 参蜘蛛語

ホームルーム終了後

「蜘蛛って臭いしないよね、七世？」

「臭いなんかしてみる。気持ち悪くて仕方ない」

「蜘蛛の臭いがすることは蜘蛛の呪いに掛かったってことだよ。意味は分かるよね、轟？」

「……何が云いたい？」

「つまり、轟は蜘蛛に呪われたって事さ」

「証拠は？」

「轟の腕」

二人の少年は轟の腕を掴んで無理矢理包帯を外した。

そこには大きな蜘蛛と蜘蛛の巣が真つ赤な血で描かれていた。

「……っ!!」

「あちゃあ……」

「腕全体が埋まるとこういう図柄になるのか」

「ここまで大きな蜘蛛は初めて見たな」

「黙れ。好きで呪われたわけじゃない」

「まあ、ただの逆恨みだからね」

「ただのじゃない!!俺様にとっては最大の屈辱だ!!!!!!」

教室の隅に座っていた少年が叫びだした。

「おーお。たかが、自分の思い込みで恥をかいただけだろ。七世は

関係ない」

「クズのしたいことはわからんな」

「お前の存在自体がム力つく！佳代は俺様のだったのに佳代はお前告白した！！しかも、受け入れずに断りやがった！！！」

少年の好きだった佳代と言う子が轟に告白し、轟はその告白を断った。少年は佳代が告白に失敗した事を良いことに自分を好きになるように言った。しばらくは佳代も少年と付き合っていたが、やはり轟が好きだと言い、別れる。しかし、少年はただの冗談だと思い、その後も佳代を自分の恋人だと思っていた。

ところがある日、クラスメート全員が見ている前で佳代はもう一度轟に告白をした。

これが呪われる前の話。この話にはまだ続きがある。

## 泗蜘蛛語

### 泗蜘蛛語

クラスメート全員の前で轟に告白をし、少年を振った佳代。轟はやはり佳代の告白を受け入れずに断った。クラスメート全員の前で恥をかいた少年は轟を怨み、蜘蛛の巣があるからと言い、轟に蜘蛛怨みを買わせた。

これが呪われ大きな理由である。

「「ただの逆恨み野郎じゃん」」

「まあ、綺麗な顔立ちだからね、七世は」

「でも、轟くんの場合・・・両方で怨みを買ってるから、呪いの浸透が早いのもかもしれない。とりあえず、俺一人じゃその大きな呪いを解けない」

「「あ。そういえば、山姥って鬼蜘蛛使いの血族だっけ」」

「うん。明日、俺の知ってる純血の鬼蜘蛛使いを連れてくる。だから、苦しいかもしれないけど我慢して欲しい」

「・・・・・・・・」

何も言わずにただ静かに頷く轟。

「これでやっと呪いが解けるね、七世」

「ああ」

「これで？」

「「轟の呪いは中学一年の時からだよ」」

「結構長い間、苦しんでたんだね」

「逆恨み野郎のせいだね。全く・・・・・・・・」

## 伍蜘蛛語

### 伍蜘蛛語

【お久しぶりです！！皆さんが大好きな松宮の登場ですよ！！！！】  
「お久しぶりでーす」

おひさ〜

【ちよっ、反応薄いですよ！てか、突っ込みも無し！！？】  
や、今日は突っ込みを入れる程元氣じゃないんで・・・

【ありや。お疲れですか、奈無さん】

「なにやら、同居人に元気を吸い取られたとか、なんとか」

【同居人！？奈無さんって結婚してましたか！！！！？】

同居人からどうしたら、結婚までいくんですか！？

【あれ、違った？何はともあれ、奈無さんは女の人ですよね】

「私もそう思う」

皆さんも女の人ですよね？

【僕は男でーす。わざと女の人っぽく喋ってたただけだからな】

！！！！！！！！

「私は女ですよ」

【でしょうね】

松宮さんが男！？

「所謂、オカマ？」

【・・・・・・さて、明日が早いので先におやすーです】

松宮さんが退室しました

「あ、逃げられた。では、私達も落ちましょか」  
はい

中山 樹さんが退室しました  
奈無さんが退室しました

## 六蜘蛛語

### 六蜘蛛語

#### 次の日の朝

「よつ、山埜」

「遅かったね。轟も自称情報屋の子達もみんな来てるよ」

「自称じゃないよ、あの変わりモノの双子はね」

「そう?」

自称情報屋の双子こと、

松宮 大樹と弟の大地は生まれながらの天才だった。たくさんの才能に恵まれていたものの唯一はまったのが、情報収集だったらしい（これはあくまで噂）。

「自称・・・ねえ」

「どういう・・・」

その二人の会話を妨げる様に一人の少年が部屋から出てきた。

「うわつ、危ないから！殺す気か！！！」

「まさか・・・」

「七世の気に障る事を言ったらしいね。あの着物かどうか言い難い服着てることと良い、俺らと差程年変わらないくせに耳に何か付けてること良い・・・見かけだけで腹が立つ」

「え！？横でも殺気出してるだろ！！！」

「まあまあ。確かに苛立つ性格はしてるけど轟の呪いを解いてくれるから、ね?」

納得が出来そうでもない。  
信じて良いのか、信じては良くないのか。

## 七蜘蛛語

### 七蜘蛛語

「ごめん、蜘蛛チカイ……」  
「いやー……君に謝られてもね」

蜘蛛と呼ばれている少年は腕に青色で大きな蜘蛛と蜘蛛の巣が描かれていた。

七世とは違う不思議な雰囲気の子だが、これもまた、変人か……？

「僕は悪くない」

「確かに轟は悪くない。でも、顔面に蹴はどうかと思うよ」

「あんたらみたいな小細工を使うよりは幾分かはましな気がするが？」

「何の事さ？人聞きが悪い事は止めてくれ。印象が悪くなる」

「双子はいつでも印象が悪いよ」

「だろうな」

「……」

「おい、おい、黙っちゃったぞ」

「どうでも良い」

「それにしてもあの噂は本当だったか」

「（あ、話ずらした）（」

「何の噂だ？」

「鬼蜘蛛使いには大きな蜘蛛と蜘蛛の巣がある、って話」



## 八蜘蛛語

### 八蜘蛛語

「鬼蜘蛛使いは世界で一人しかいない貴重な存在なはずだよ」

「純血が世界で一人ただけであって鬼蜘蛛使いは沢山存在してるぞ」

「あと、君は何年生きた？」

「17くらいだ」

「それはあつちの世界で云うとでしょう。この世界では”在<sup>ア</sup>”の国、あちらの世界では”陰<sup>イシ</sup>”の国とも云うね」

「こつちの世界だと・・・50年くらい」

「へえー」

「あつちとこつちだと、かなりの時差があるからな。結構来るのに時間がかかるんだよ」

「なる程ね」

「もしかして情報収集してた・・・？」

「何を今更」

（（馬鹿だ））

「馬鹿か、お前？」

「馬鹿ちゃうわ！」

「馬鹿だろ」

「違う!!」

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿」

青年の心に傷が入った

「50歩譲って俺が馬鹿と認めよう。だが、その馬鹿に呪いを解いてもらうお前はどうかんだ？」

轟の気に障った

「何が云いたい？」

「殺気出てるからしまえ」

何となくムカついたので暴力を振るってみる、轟

「痛っ！！痛い！やめんか！」

「蜘蛛、話がズレてる」

「ハア・・・」

「「馬鹿だ」」

「ちよっ、何でみんな呆れてるのさ！？」

「名前も名乗らない奴が偉そうにものを言っな」

「あれ、名乗ってない？」

八雲を見る蜘蛛

視線をそらす、八雲

雅を見る蜘蛛

すでに背中を向けている、雅

「みんなして酷いな！！」

「俺は関係ないもん」

「まあいいや」

「いいの！？」

「改めまして、俺は鈴<sup>レイ</sup> 蜘蛛<sup>チカイ</sup>だ」

## 仇蜘蛛語

仇蜘蛛語

「蜘蛛廻、ねえ」

「人の名前にまで文句付けんな」

「何も言つてないよ」

「蜘蛛廻、早く治してあげないとタイムリミットがきちゃつよ」

「あ、はいはい」

やる事をすっかり忘れていた蜘蛛廻。

本当に大丈夫か？

「じゃあ、八雲の家の道場借りるぞ」

「あ、うん」

「いつ見てもでっけえな」

「まあね。で、陣はもうひいてあるから」

「やる事が早いな」

「あ、轟は道場の外にいて。呪いがあるのに入ったら拒絶反応が起こつてそのまま死ぬ事もあるから」

「蜘蛛、恐るべし」

「「逆恨みは最悪な自体を招くなあ」」

「でも、強力な呪いの場合は呪った本人にも罰がくだる」

「「人を呪わば、穴二つ」」

「そう云う事だ。呪いなんてな、生身の人間が簡単に操れるものじゃない」

人が人を呪うのは容易ではない。人を呪わば、呪った本人にまで呪いが行く可能性も多いにあるのだから、簡単に人を呪ったらそれで自分も死ぬ事と一緒に、と同じ事になってしまう

「よし、完璧だな」

「目を瞑って、このお守りを持ってそこに座って」

「・・・八雲、良いな？」

「うん」

辛い、悲しい想いは人、それぞれ

恨みもまた、人、それぞれである

## 拾蜘蛛語

### 拾蜘蛛語

「恨み、怨念、縛、束縛、呪い、呪術、掛け合い、交差、蜘蛛の神に値する鬼蜘蛛よ、純血・鬼蜘蛛使い・矜 蜘蛛廻がお前に命ずる、呪うに値しない少年を呪い、呪うに値する少年を呪わない、これは可笑い」

「巢を壊した少年を呪う、これが当たり前だ」

「堅物だな。呪うべき相手は轟 七世ではない」

「では、誰だ？純血・鬼蜘蛛使い・矜 蜘蛛廻よ、貴様に問う」

「轟 七世否、守永 トウヤ」

「純血・鬼蜘蛛使い・矜 蜘蛛廻の命に従おう」

「うつ……」

「七世！」

「轟！」

「つと……」

あまりの邪気に気絶してしまった七世

「あれが本当の話なんて誰も信じないよなあ」

「仕方ないだろ」

「世の中そんなに上手くいったら誰も苦労しないだろ」

「そうだよ」

「まあね」

誰も知らない

誰も信じてない

これが信じられる物は少ない

## エピソード

### エピソード

【こんにちはーです！】

あ、松宮さん。こんにちわー

「いや、もう来なくて良かったですよ」

【樹さん、酷いですよ】

それより、蜘蛛の呪いって本当にあったんですねー

【おや、間近で見ましたか？】

「奈無さんの同居人が見たらしいですよ」

はい！真つ赤な蜘蛛の巣と大きな蜘蛛が腕に書いてあったらしいです！！

【同居人さんグッジョブです！！】

あ、でも、同居人と言うよりは弟ですがね

【弟？】

「あら、ご兄弟がいましたか」

はい

秘密

【奈無さんの弟って、九重 雅、ですか？】

はい。もしかして、リア友ですか？

【友達と言うよりは嫌われてますがね】

あらら

秘密終了

「すみません、私はそろそろ寝ます。明日早いもんで」

【はい、おやすー！！！！！！】

「うざいですね、松宮さん」

おやすー

「お休みなさい、奈無さん」

中山 樹さんが退室しました

【え！何、この差別！！？】

まあまあ。では、私も寝ます。おやすー

奈無さんが退室しました

【ありや。仕方ありません、今日はこの辺にしときましようか】  
松宮さんが退室しました

エピソード、これにて終了

呪われた青少年？蜘蛛怨み

閉幕



エピローグ（後書き）

祝 完結

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3088k/>

---

呪われた青少年      ～?蜘蛛怨み～

2010年10月9日01時54分発行